

---

# 五月雨の中、君を想う

要徹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

五月雨の中、君を想う

### 【Nコード】

N9696L

### 【作者名】

要徹

### 【あらすじ】

「ねえ、君は覚えてくれているかい？ あの時のことを」

## Side A - 1

ああ、輝かしき、くだらない日々。

五月雨は冷たく、僕を嘲笑うかのように打ち付けた。モノクロームに染められた空は何者も祝福しておらず、ただ、僕の薬指に嵌り込んだシルバリングを鈍く光らせるだけだった。つい先日まで咲き誇っていた桜たちも、今の僕のように色彩を失っていた。路上に散る花卉の数は、僕が流した涙の数と同じくらいだろうか。数え切れない、数える気にもならない。

思えば、今まで過ごしてきた日々は、そして彼女は、ガラクタ以外の何物でもない、取るに足らぬ、些末なものだったのだろう。そこらに落ちている砂の粒一つの価値にも劣る。しかし、ガラクタは、間違いなく僕の宝物だった。それは変えることのできない事実であり、僕が認めることのできる唯一の事柄だ。

嘘で覆われた世界の真実なんて、真実ではない。それは嘘だ。

そう、彼女がいない、ということも真実ではないのだ。

大切に、大切に、硝子でできた球体を扱うかのように、羽毛で我が子を包み込むかのように、慎重に、それでいて、時には大地が怒りに震え、すべてを破壊するように扱ってきた。

解けかけた赤い糸に、何故僕は気づかなかったのだろうか。罅の入った彼女に、何故早く気づいてやれなかったのだろうか。繋ぎ止めようと思えば、きっとそうすることができた。失いたくなかったはずなのに、ガラクタを守りたかったはずなのに。今では、後悔するだけ無駄で、空から降下してくる雨粒をすべて拾い上げようとするほどに、馬鹿なことだ。

こうなってしまった後なのに、彼女を想い続けることが馬鹿馬鹿しいことだなんてことは分かりきっている。しかし『無駄』、『馬鹿らしい』という言葉だけで割り切れるほど、僕は単純ではない。

縋り（すが）つくことのできるものが有り続ける限り、僕はずっと、永久にこのままだろう。

ずっと感覚を研ぎ澄ませば、右手に彼女の柔らかい指が絡みつく感覚が蘇るし、耳を澄ませば、彼女が好きだったクラシック音楽が、まるでコンサートホールで奏でられているかのように臨場感をもつて聞こえてくる。けれども、今現実にあるものといえ、空と雨、それだけだ。

ざまあみる。きっと、僕を知る人たちは口々にそうやって罵る（ののし）だろう。ひどく冷たい雨が、一粒、また一粒と、僕の空っぽの頭に、砂漠のように枯れ果てた肌に、もう彼女の手を握ってやることのできない無力な手に、そして二度と共に歩むことのできない両足に触れる度、僕はこれが嘘ではなく真実であることを認識する。雨は絶えることなく、僕に真実を見せ続ける。

彼女のエンドロールに、僕の名前はあるのだろうか。僕のことを、ガラクタと同価値の日々を、ずっと忘れないでいてくれるだろうか。記憶というフィルムに刻みつけておいてくれるだろうか。

彼女に想いを伝えた時を、今でも鮮明に思い起こすことができる。あの時は、見るものすべてに色彩が宿っていて、世界は僕に今まで見せたことのない顔を見せてくれた。猛獣のように威嚇し、牙を？いた顔ではなく、本当に、とても優しい笑顔だった。

## Side A - 2

両手に色とりどりの花束を持ち、葉桜の下で僕は彼女に想いを伝えた。

『好きです』のたった四文字を吐きだすことだけに、一体どれだけ悩んだか覚えていない。しかし、告白の日に四つ葉のクローバーを見つけたことだけは覚えている。綺麗に形の整ったクローバーだった。世界は僕を嫌っている、と常々思っていたが、その時ばかりは好かれていたと感じた。

青々と輝く葉桜は、僕を祝福してくれた。

彼女は花束を手にとると、にこやかにほほえみ、ありがとう、と言ってくれた。

本当に嬉しかった。大声で泣いた。ありがちな表現ではあるけれど、天にも昇る気持だった。

僕は、人目もはばからずに彼女を抱きしめた。爽やかな五月の風が、僕を、そして彼女を包みこみ、彼女の体温が僕に伝わり、彼女とすべてを共有している気がした。あの時に感じたものは、とても言葉などというものでは表現しきれない。いや、この世に存在する何を使っても不可能だろう。

永遠の愛。そんな夢く、少し触れれば崩れてしまうようなもので、僕は愛を誓ったと思う。当然、当時はそれを守りきるつもりで口にした。いや、守るべきものだと思っていた。

紫陽花あじさいが咲いても、青い葉が赤に染まっても、そして世界が白く化粧をしても、僕は変わらずに彼女を愛し続けた。何も不満はなかった。あの日見た空がいつまでも変わらぬように、僕の彼女への気持ちもまた、不変のものだった。けれども、それは僕の独りよがりであり、勘違いなのかもしれないとも考えていた。彼女の気持ちは、季節のように移ろいでいる、と。僕は、できるだけそういったことは考えないようにした。

### S i d e A - 3

想いを伝えて、丁度三年目だっただろうか。その日はひどく曇っていた。空は今にも泣きだしそうで、色は徐々に失われつつある、そんな日だった。

二人で肩を並べて歩いていると、彼女が、いつになれば結婚するの、と訊ねてきた。僕は、とうとう答えを出せねばならないか、と思つたものだ。今までにも、彼女からこの手の話を幾度となく耳にしてきた。その度に僕は答えをはぐらかし、先延ばしにしてきた。決して彼女が嫌いだったのではない。結婚することが嫌だったわけでもない。ただ、この日常を変えることが怖かったのだ。ちよつとした衝撃で壊れてしまいそうな、このガラクタのような日々が愛しくて仕方がなかった。けれども、僕はもう覚悟を決めていた。

彼女と共に、人生を過ごすことを。

僕は、彼女と向き合い、しっかりと目を見させた。自分の気持ちが、決して偽りではないということを証明するために、今まで答えを出せずにいて済まない、という気持ちを示すために。そして、優柔不断な僕を戒めるために。

その時の彼女の瞳は、ひどく潤んでいた。底のない大穴のように深く、暗い瞳。ゆっくりと上下する肩。薄く朱に色づいた頬。僕は永久にそれを忘れないだろう。

結婚してほしい。よく覚えていないが、僕はきつとそう言ったと思う。月並みな言葉だ。洒落でもないし、何一つ飾られていない、プレーンなもの。甘くもない、辛くもない、酸っぱくもない。場所も、夜景が見えるレストランではなく、すぐ横を車が走っている道だ。ロマンチックの欠片も見当たらない。

決意を伝えた後、僕はスーツの内ポケットからマリンブルーの箱を取り出して、蓋を開いた。中に入っていたのも、内側に彼女の名

前が刻印されている以外、何の変哲もないシルバーリングだ。

それを見た途端、ぼろぼろと、今まで溜めこんでいたものを吐きだすかのように大粒の涙を流し、そして彼女は大声で泣き始めた。その姿はまるで赤ん坊のようだった。僕には、その涙が悲しくて流されているものではないことが分かっていた。つい三年前の僕も、まったく同じだったからだ。きつと、あの言葉が欲しくて、欲しくて仕方がなかったのだ。磁石ならば同じ極同士は離れていくものだが、僕らは違う。例え同じであっても、惹かれあう。

喜んで。彼女ははつきりそう言った。僕は黙って頷き、指輪を彼女の薬指へとはめてやった。華奢な指に輝くそれは、見事に彼女と調和して、本当に美しかった。彼女は指輪を着けた方の手を口元にもっていき、くすくすと笑った。濁った空と、透き通るような彼女。その二つの不釣り合い感と言ったらなかったが、とても愉快だった。彼女はそれから、ゆっくり気持ちを語りだした。聞けば、このまま答えが出ないようであれば別れることも考えていたという。やはり、彼女の気持ちは移ろいでいた。僕の予感的中していたわけだが、素直に喜べないでいた。関係が崩壊してしまうという最悪の事態は免れたわけであるし、これから待つ結婚生活を思うと胸が躍ったが、何か、心の隅に、べつとりとこびりつく存在を僕は感じた。僕はそれを拭い去るために、彼女を力一杯に抱きしめた。けれども、それは、影のようにまとわりついて離れてくれやしなかった。それどころか、増々大きくなり、僕の心を覆っていった。黒く、鈍く、重く。

と、その時。さあっという音と共に、濁った空が泣き始め、その涙でアスファルトを濡らし始めた。雨は一気に勢いを増し、すべてを破壊し尽くさんばかりに打ち付けた。僕と彼女は、近くにあったバス停へ向かい、一時を凌ぐことにした。そこから見える光景は靄がかかっているように見えた。激しく大地へ降り注ぐ雨で、一切の視界は閉ざされていた。唯一はつきり見えるものは彼女だけで、彼女は光を射し込ませない森林のように憂鬱そうな表情で、何も見え

ない前方をただ眺めていた。彼女の体は濡れ、水を吸った服が体に張り付いている。僕のスーツも、ひどい有様だ。

時折、目の前を通過する車両のライトが雨に反射する。

雨が止む気配はない。この季節の雨にしては、しつこい上に冷たかった。濡れたままでいては、きっと彼女は風邪をひいてしまう。彼女が小さなため息をついている。きっと、この雨に鬱陶気を壊されて腹が立っているのだろう。僕も同じで、この雨が恨めしくてならなかった。いつまでもこうしてはいられない。

傘を探してくるよ。僕がそう言うと、彼女は笑顔で頷いた。そして、無理はしないでね、と小さな口で呟いた。けれども、僕にその言葉は聞こえていなかった。彼女が最後に交わそうとした言葉を聞き逃していただなんて、僕はなんて愚かなのだろうか。悔やんでも悔やみきれない。

バス停から飛び出していった僕は、どこかにコンビニエンスストアでもないものか、と雨に打たれながら探し続けた。春の陽気、それとは真逆の寒々とした空気。まるで真冬のように張り詰めた世界。息を吸えば、肺に湿気が染み込んできた。

僕は、その雨に打たれることが好きだった。この雨に耐え、傘を見つけたその先にあるもの。彼女と寄り添って歩き、ずっと見続けることのできる笑顔。たったそれだけのことを考えるだけで、恨めしい雨は愛しくなった。冷たいはずの心は、増々熱を帯び始めた。しかし、その熱い心も徐々に冷えていった。

傘は、一向に見つからなかった。

落胆して、ふとアスファルトを見やると、そこに一羽の小鳥がいた。茶色い毛で覆われていて暖かそうであったが、その小さな体はぴくりとも動いてはいなかった。きっと、バケツを一気にひっくり返したかのような豪雨に打たれ、飛び立つことができず、そのまま息絶えたのだろう。周りを見渡しても、彼を救おうとする仲間はいなかったし、死を弔う仲間もいなかった。灰色の大地へ降り注ぐ雨音が、彼の悲しみの声を掻き消していたのか、この声は聞き届けら



れなかったのだろう。もう二度と、仲間と大空を飛びまわることはできない。

僕はそう思うと、ひどく悲愴な気分になった。せめてもの弔いに、小鳥の死骸を拾い上げ、花壇の土の上へと寝ころばせ、目を閉じ祈った。

## Side A - 4

そうこうしているうちに、雨は小降りになってきていた。結局、傘は見つけられなかった。こんな簡単なこと一つもできない僕を、彼女はと思うだろうか。馬鹿野郎と罵るだろうか、それとも、頑張ったね、と優しい声をかけてくれるだろうか。

肩を落とし、頭を垂れて歩を進めていくと、彼女の待つバス停が見えてきた。彼女は、相も変わらず無表情で前方を眺め、雲間から微かに射し込む光に、少し目を細めている。僕に気づくと、軽くほほ笑んで大きく手を振ってくれた。遠目からでも分かる、彼女の温かい優しさだった。

僕はさっき見た死骸を思い起こしながら、彼女の方へとゆっくり、一步一步着実に歩を進めていった。早く、震える体を彼女の熱で暖めたかった。彼が味わうことのできない熱を、彼が味わうことのできない幸せを噛みしめたかった。

彼女まで、後ほんの数メートルに迫った時。彼女の表情が急変した。女神の如きほほ笑みは、驚愕に歪んだ。僕は何が起ったのか理解できなかった。いや、理解する間もなかったのだ。

突然鋭い光が射しこんだかと思うと、バス停のベンチを吹き飛ばし、鉄の塊が突っ込んできたのだ。薄暗い空は茜色に染まり、雨がそれを脱色していった。僕は、信じられなかった。今まで形を為していたものが崩壊し、手に入れかけていたものも儚く散っていく様

が。  
次に僕が見たものは、瓦礫に埋もれた僕の体を探そうと必死に手を動かし、あの五月雨のような涙を流していた彼女の姿だった。声にもならぬ声を上げ、僕の体から滴る血に手を赤く染め、半ば狂ったかのように僕を探していた。

そうだ、僕はあの時、死んだのだ。

掴みかけた幸せは、するりと手から抜け出し、今は飛び立てない、  
彼が憧れた大空へと飛び立っていった。永遠の愛を守りきることが  
できなかった。誓いとは、かくも儚いものであることを知った。

僕がもっと早くに想いを伝えていれば、あるいは　あの時、あ  
の雨さえ降らなければ、僕は生きていたのかもしれない。そして、  
彼女と共に、小さな幸せを噛みしめ続けていられたのかもしれない。  
あの小鳥も、きっと雨さえ降らなければ、今頃大空を飛び回ってい  
たことだろう。

## Side A - 5

あれから、また三年が経過した。彼女は五月雨の中を、今年も傘をささずにやってきた。左手にはシルバーリング、右手には花束を。彼女の顔に涙はない。

僕は、この日が来る度に安堵<sup>あんど</sup>する。そして思う。僕が前を向かなくてどうするのだ、僕がいつまでも後悔の海に沈んでいてどうするのだ、と。

彼女は、しっかりと前を向いている。容赦なく降り注ぐ雨に打たれても、瞬き一つしない。風に頬を打たれても、毅然<sup>きぜん</sup>とした態度でいる。それに比べて、僕はどうか。死んでからというものの、ずっと後悔し続けている。天にも昇れず地にも堕ちられず。宙ぶらりんなまま三年が経過している。だが、僕はこのままで良いと思う。ここにいなければ、僕はもう彼女に会えないのだ。彼女に会えるならば、僕はずっと彼女に嫌われるような人間であろうと思う。

彼女は、こんな弱い僕を殴りたくてしょうがないだろう。永久に愛を誓ったのにも関わらず勝手に僕がいなくなってしまった上に、ずっとうじうじと下を向いているのだから。僕を憎んでいるならば、甘んじて受けよう。けれども、僕には分かる。彼女が僕を憎んでないってことを。彼女の気持ちは、季節のように移りゆくものではないってことを。仮にそうでないとするならば、僕は今すぐに天へと旅立ち、シルバーリングを遙か彼方へ放り投げてしまおう。しかし彼女がそうしない限り、僕もしない。

だって、僕は彼女に永遠の愛を誓ったのだから。

また、葉桜の季節に会いに来よう。

さようなら、愛しい人よ。

## S i d e A - 5 (後書き)

とりあえず、S i d e A が完結です。

ここからS i d e Bを開始する予定ですが、もしかすればこれで完結、ということになってしまつかもしれません。  
その時はご了承くださいませ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9696l/>

---

五月雨の中、君を想う

2010年10月8日14時25分発行